

常磐松文庫蔵『九条家本源氏物語聞書』翻刻(四)

徳岡 涼  
渡邊 道子

凡 例

一、本翻刻は、本学常磐松文庫蔵『九条家本源氏物語聞書』(五冊)のうち、第四冊目の「夕霧」〜「竹川」について、可能な限り原本の様態を復元し得るように翻字することを目的とする。

二、右の目的を果たすために、翻刻の際には次の基準を設けた。

- 1、改行は原本に従う。半丁毎に「」印を付してその下の( )印内に、墨付丁数及びオ・ウの省略符号を付記する。但し表紙・見返し・前後遊紙の場合は、その旨を「」印下の( )印内に記載し、丁数には含まない。
- 2、本文・書き入れ注共に全て原本に忠実に翻字した。猶、不審の箇所があっても、みだりにこれを改めることはしなかつた。

3、一応現行の字体に翻刻するが、異体字を残したところもある。又、意識して片仮名表記がなされていると思わ

れる部分に關しては、片仮名表記を残すこととした。

4、見せ消、合点、濁点その他の諸記号は、可能な限り、原態に即して表記することを原則とした。また頭注・傍注・脚注等の書入れが二行以上にわたっても、そのまま忠実に再現する。

5、紙片貼付の箇所□印、また注記・補記すべき箇所については□印を用い、下の欄外にその旨を記した。

三、各巻の礎稿の担当は次の通りである。

夕霧・御のり・まほろし（渡邊）

かほる中将・紅梅・竹川（徳岡）

翻 刻

（外題なし）

（白紙）

（白紙）

（白紙）

┌（表紙）

┌（見返し）

┌（前遊紙オ）

┌（前遊紙ウ）

夕霧

以歌為卷名詞にはたゞ霧とあり鈴虫の巻は八月

十五夜の事ニとゞまる此まきは廿日より冬までの支

みえたり源五十歳也

山里の哀をそふる夕霧に立出ん空もなき心ち

小野といふわたりに 伊勢物語の小野と同処河海ニ云して

御前コサシなど

弁ノ君 紅毒右大臣也

小野は比叡坂本也今の大原花鳥ニよ河の麓  
たか野と云処也和秘抄云くるす野を云哉らん  
ひゑのふもとにある小野を云哉らん何も定かたし

とみにはまゐり給す 夕ぎり也

人にうつりちるを——物のけ人に移もの也

わたらせ給し—— 御供奉に参らんものをと也

れいの少将の君など—— 夕霧の御知人也

みつからきこえ——かたはらいたさに 慮外さに也

ひなをりて 礼儀の躰なり

身にかふはかり—— 御息所ノ御なやみを女二宮の

身ニかゆるはかり也

かたしけなけれと 慮外なれ共也恐かましいなん

とゞ云心也

はれくしきかたに—— 御息所ノ御なやみよく成給ん

まて也

平かに—— 先ッ女二宮何事もおはせぬ事肝要と也

しかはりて—— 時かはる也 し文字にこるへし

中空なる—— 中間也 御つかさのそう—— 右近の将監也

「(1オ)

「(1ウ)

第一丁右肩ニ「九条」(単郭朱方印)。右下隅ニ「実践女子大  
学図書館」(単郭朱長円印)ヲ  
捺ス。

くるすのゝさう<sup>野</sup> 夕霧の御知行欵 くるすの御さう也

野の字は聞きよきに依て入たり 又山科<sup>ツノノツルネ</sup>小野栗栖と云い

つゝけたる所あり其はくるす野也それにてはなし

さはいへとことにみゆ 異に也 世間には御形よからぬやうニ云へ

共さもおはせぬとおもひ給ふ也

かうしもさなから—— 格子をおろさぬ事也あけなから也

えなんしつめ—— 女君をちとおどして夕霧のの<sup>歌</sup>

我のみや—— 女二宮の哥也ぬれそふ袖とはかしは<sup>給り</sup>

木の事ニぬれし袖を又ぬらすと也

大かたは—— ぬれ衣を吾きせ申す共柏木ノ事は名かく

れましいと也

過にしかたにおほしおとす—— かしは木よりも思ひおと

給と恨み給也

しらぬ事くとけしからぬ心つかひも—— おどし

給夕霧の御心也ちとふて事ノ様なる詞也

後をこかましくやと 終につれなくはをこかましからん

夏冬と—— 花ちるの御方ニしをかせ給り とそ

きこえもらさなん 御息所へもらし聞えよかしと女二

宮の心なり

事しも有かほに 事あり顔に也

あやしう何心もなき—— 落葉宮の詞也

あはれなる御心さまは—— 夕霧よりの御懇切の事也

御内の女房共の心也

「(2ウ)

「(2オ)

虫損。

日中の御かち ニツチウ

せちにもあらぬ——よからぬ支と也

さうじ フスマ障子の支也

うこぎすへう すもし清ム

すこしおほしなくさむるかたはあれど 是ニ心を付へし

実事なき義を心安くおもひ給也

又めぐり参るとも——又生れ逢とも誰共しるましい

程にかひなき事と也

むねすこしあげ給ふ 御息所の御機色ちとよきに依て

おちはの宮の御胸少しあく也

待きこえ給けるに——御息所の御心

そこに心ぎよう——底

大かたのもてなしは又ならぶ——かしは木の事也

大とのゝわたり 致仕のおとゝ也御息所の心中

あやしき鳥の跡のやうに——わけの見えかぬる躰也

翁のながしまもりけん——つうくつもなく守られ

てゐる体なり 古抄ニ説多シ

物のいへくしき——あまた并べをく事也

にはかにとおほすは——夕霧の語なり

あいなき人——女二宮ノ御事也

太夫 タメウ

女君の——雲ゐの鷹

いかになしてしにか——何と云なさんと也 いかにしてか

「(3才)

「(3ウ)

也 しには付字なり

ひたやこもり 無意趣なり

うつしをきて—— うつしは鞍の名也<sup>移</sup>うつしぐらと云あり

隨身の乗馬ニ置ク鞍也

打とけたりしありさまを—— 落はの御心中

今さらに六かしき—— 御息妬の詞也 異見か  
ましい

事を云まじとおもへ共と也

思ひのほか<sup>レ</sup>に心にもつかぬ—— 柏木と夫婦に成給事也

こよなう情なき人の—— 夕霧の事也恨み給り

をしこめての給ふを—— 何をもかをもひとつに仰らるゝ也

日比もなやみ—— 朱雀あんの御文章ぞ

物もえの給やらす 夕霧の

いとつらき人の御契—— 女二宮の心也此<sup>レ</sup>更ゆへに御

息所の御心みたれたれば也

いかにして俄にと—— 夕きりの語也其時の事を問給り

こよひしも—— 葬送の事

御心のひまあらし—— 爰にはえおはしますましいと也

大宮のうせ給へりし—— 夕霧の詞也大宮は<sup>ン</sup>うば君そ

あるや恋しきなきや悲しき 雲井のかりの哥也女二

宮と御息所との事をよみ給り

猶かく隔て給へる—— 夕霧の心也

ときやう 讀<sup>ニ</sup>経<sup>ト</sup>フキヤウ如此よみ給へり

なをし なうしトよめり

┌ (4才)

┌ (4ウ)

にび色のきちやう—— 少将の様子也

この人も—— 少将なり

過にし御事にも—— かしは木の事

そよや—— 夕きりの詞也わか御うしろみをせんの心

をよこしての給り

世よにありへし 有経よへじ

我もしかこそ さうこそ也 鹿も兼てよみ給り

いまはかく—— 女二宮の御答也

をくらの山も—— 爰の名所にてはなれとおもひ出して只

何となくいへるはかり也 暗からぬといふ心迄なり

大納言こゝにて—— かしは木也

そむきく 清濁いづれにても

いつとかは—— 夢覚てとかいひし一言とあるは前

夢の世を少しおもひさます折あらは——と有し=依て也

少将也 少将也

曳やりて 引破ひら也

音なしの瀧 小野=あり又をとなし河は紀州の名所也

人のうへにて—— 夕霧の心中也人の上に見しはもどかし

かりしと也

女のためのみにこそ—— 雲るのかり又は女二宮の御事

笑止=源氏のおほしめす也

いふかひなきものに—— 無風流の女也

三とせより—— かしは木逝去の事

┌ (5才)

┌ (5ウ)

虫損。

かのみこ。女二宮なり

かのみこよそは——人さまも——の給ふ 源御詞也

さやうのこのおもはずなるに付て—— 夕きりのさはきの

そまつなるやうなる支なとあり共恨てはあしからんと

朱雀院おほしめさるゝ也

さらがへりて 新しくなして也

たゆるにしたかひて 随分なり

左少将—— 兩人なり

<sup>哥</sup>のほりにし嶺の—— 母の煙に立ましり度と也

御はさみ 髪をはさむはさみなり

そのほいの事も—— 髪をはさみて尼ニ成事もえし

ず経 給す

くろきも 服者の色なり服中には何をも黒クする

三条殿には 雲あのかり 物也

宮の御ためにそ—— 宮の御心ゆかぬをさはおもふ

人有ましといたはりて書たり

いたつら人に—— 御息所の事

いかて人にもことはらせん—— 此様ニつれなき支は有

まし人に批判させて聞度事そと夕霧の仰らるゝ也 瞬

花ノ説はさも有へけ共すくれすと素然はの給り

さすかにいとをしようもあり—— 少将の夕霧をいた

またしらぬ—— とはかやうの支ニなれ給ぬおちはなれはと也

さあれは落はの御道理か又は夕きりの御道理か何れに

「(6才)

「(6ウ)

下ニ擦リ消シノ痕有。

哥  
よる人あらんと少将の云る詞也

うらみ侘—— 此哥惣而の心は冬の夜の明かたきといふ支也

関の岩かと云はあふさかの関の岩かと云はかゝりての事也  
逢と云はよりての義也

六条の院にそ—— 花ちるのかた也

のとやかにならひ給て きつかひもなくて也

わらひ給て—— 花ちる卑下の詞なり

日たけて殿に—— 三条へ

なまめい給へらんあたり—— おち葉の御支

何事いふぞ—— 雑言めきたり

わかやかに—— 雲の鷹の支也

御かへりたになきよと—— 文の返事也

き哥のふ今日露も—— 雲井のかりの躰歎

なる身哥を—— 夕霧になる也 壺は尼はよせ

たり尼にならんと哥の心也 古抄ニ猶あり

打いそきてなをくしや 草子の詞也急きてよみ給ふ

ゆへに造作もなき歌と云る也

うらめしかりける人のゆかり—— 御息所も此支はより

おもひ歎死し給ぬれはうらめしきゆかりと也

うしろやすきものを句を切て下を思はず

猶かゝるみたれに—— 女二宮ノこと葉也

人の聞もらさん事もことはりとはしたなう 是したなくは

面目なくなり

┌ (7才)

┌ (7ウ)

ひとへに 一へんニといふ心なり

けにともおもひ 句を切て下を 見たてまつるも——  
/夕霧の事也 /女君の支也

こ君の 古君也 かしは木の事をいふ

吾み心をこしらへ給 吾と心をなをす也

おんな所にて—— 女ところは小野にての事を云り男

なきによりてかくいへり小野の名を女所と云ニは非ず

住なれかほ—— 落はの宮の御かたに也

れいのわたり給ふかたは 御里にて雲ゐのかりおはし

ます処也

くだくしき人 子たちの多き事をいへり

何ことも今はと—— 雲ゐの鷹の詞也

はゞきみの御をしへにな叶イ給そ 夕きりの語也

よしかく—— 何かはをれてふとしも帰り給 聊余ニ御かへり

有うする支にもあらずと也

哥 内侍のすけ 藤内侍也惟光か女

人の世の—— 雲井の雁の哥也

此むかしの御中たえの—— 夕霧と雲ゐの雁

中絶の事ありし也その時の事也

ひんかしのおとゝにそ 花ちるの御方ニ也

(五行分空白)

もとつとめさりける家司—— 小野にては大和守一人

なりしか今はかれこれ参あつまる也

┌ (8才)

┌ (8ウ)

┌ (9才)

一夜はかりの御文を——えしもすゝきいて給はしと頼しかり

夕きりの心也 前ニ女郎ノうたあり御息所の哥也其事をけり

云り御息所御合點ありしかはそれをはえすゝき清め

給はしとなり

心ゆるされぬ事はあらしと—— 女房衆などのゆる

さぬ事は夕霧のし給はしと也又夕きりのまめたち

云給ふニ女二宮なひき給すはあらしと也宮す所の心也て

私打とけたる——は御息妬の心の落付歎

すべて——えのたまひやらす 女二宮をこなたへともえの給

<sup>哥</sup> やらぬ御息所のよはくしき様躰也

せくからに浅さそ—— 夕霧の哥也つゐにせきえぬ物

ゆへ厭イ給ふは浅しと也二葉 なかれての名とはいかに名の立

支をつゝみ給ともいや契を懸たる名はもれしと也されは

此まゝは何と有共相果さじとなり休 水をせくと云も浅き

事也せくとてそのまゝならばこそあらめ用すはせくるあた

成て名のたつ支有へきと也林

けぎやかなるけしき—— かけはなれたる様には夕霧の

文の見えぬと也心ちよかほとは歌も終に契も結へきよしを

聞え給へは也一葉 はやあひ給し文とみえたりと御息所ノ 思給也林

あさましようこはいかに—— 夕霧の詞也花ちる里よりの文を

のべ給り林

院の御前にはへりて 六条院也林  
なをくしの御さまや 平人などのやうにいやしきと也林

「(9ウ)

「(10オ)

大夫のめのと 雲ゐの鴈のめのと六位すくせと云しめのと林

私ニ大夫欲如何

あだへかくして—— 心はあたしくされたる也

大和のたみの妹と—— 少将の支也 おほし立とは御息

処のめいなればはぐみそたて給し人也衣の色こくとはちかき

親類ほとこく染るもの也林

つるばみのきぬ—— 椽 黒色なり黒夕服を染る也ふし  
かね

にて染る也服者の用る色也藤裏葉の卷もあり 又

四位以上の袍をもこれにてそむるそ故につるはみの衣と云々  
河々

殿におはしても—— 雲ゐのかりの方也林

あらざりし御くせ哉と—— 夕霧の實なる人にて

有しかゝる事のあると。女房衆はらだつなり

六条院の人くを—— 彼院にはかたくをはしませと御

中なたらかなると夕霧の常はめ給ふ也それは本より

其分なり雲ゐのかりはいまたならばぬ物をと也雲ゐの

雁ノ御詞也林

このうきたる名をそ—— 夕きりの思かけ給ふ事也林

さりとて又あらはれて—— 女二宮の心を院のをしはかり  
給也林

はつかしとおほさん—— 女二宮のおもひ給んと也朱雀ゐん

の御心也女二宮ノ夕霧の支を愧しく思召いかゝあつかひ

給んとなり

一条にわたり給へき—— 柏木の古宮へ女二宮ノわたり給ふ事也

その日はかり—— 幾日の程と云心也

レ (10ウ)

レ (11オ)

本文科紙ヲ用イテ付箋ヲ貼付。  
本行ト同筆。

何ことも身のためこそ侍れ—— 御身の為とおもへ共御

同心なきと也休 御心ニちかひては身の為あしかるへき事となり一葉

事といへはひたおもて—— つよくいふ心也ひたおもてとは

おもはゆき心也一葉 直ニ對面したるやうの心也花

たゞいさゝかのひまをたにと—— 物なと聞えん支を

なり共と侘給也

東おもては屏風をたてゝ 服の具ともを忌てしつらひ

たる也林

ちんのにかひ—— にかひとは棚なり林

誰か名かをしきとしてしるて—— 女の御名こそ立へ

けれとなり林

(六行分空白)

(白紙)

(白紙)

(白紙)

御のり

以哥為卷名源氏五十一歳の春より秋までの事

みえたる紫上この秋うせ給り

たえぬへきみのりなからそたのまるゝ世々にと結結ふ中の契に

(一行分空白)

あかぬ事なく 不足なる事もなきと也

ほたしたに—— 御子のなき事也

さるは我御心にも—— 源しノ御心

┌ (11ウ)

┌ (12オ)

┌ (12ウ)

┌ (13オ)

┌ (13ウ)

下ニ擦り消シノ痕有り。

こゝなから 現世なから

あさへたる へは付字也アサニ 説多けれ共只浅きと心うへし

わか御殿とおぼす

ましてこのころになりて 今のはきは近なる比也

薪哥こるおもひは—— あかしの上の返哥 経於千歳

と云経文に当る哥也 咲花には千歳給仕トあり 兎角ニ祝

して讀給ふ歌そ 猶河海にくはし

たえぬへきみのり—— みのりとは身を兼たり契は

法歌のちきりなるへし

残りすくなきみのり—— 有のまゝの心欵 又は花ちるは

年まさりなれはのこりすくなき身と讀給欵

中宮此院にまかて—— 二条院なり爰にて始て中宮と聞ゆ  
猶花鳥ニ  
くはし

なたいめん

ゆゝしげになどは—— 遺言の様には仰られすして也

三宮はあまたの—— 匂宮也

はゝをこそまさりておもへ 紫上の事を三の宮のの給ふ

ことは也 はゝと云心也然共濁りては讀へからす

あさくくと 鮮やか也

此御前ツアにてはこよなく 中宮のお前なり

やゝもせは—— 源氏ノうた

宮もかへり給はて 中宮也

かぎりなくおほす 中宮の帰り給はて限りのさまを見

届給を限なくうれしく思すといふ心もこもる也

「 (14才)

「 (14ウ)

御木帳のかたひらをものゝ給—— 夕霧のかくの

如して見給ふなり

御とのあふら—— 是は源しの

十四日 じうしにちとよむへし じうよと讀は四文

字をいまひての俗言也

心よはき後のそしりを—— 此ゆへにまほろしの巻過て

己後ニ御出家なり

あみた佛ホトケ—— 夕霧の唱給ふ

今はと見えし明くれの夢 私上にも明くれの夢にま

どひ給ふほどさら也とありそこにこたへて書る歎

法花経など—— 二条院のやうたいなるへし 紫上の事に乱給ふ心也

いとかくをさめんかたなき—— 取乱て人に見えましいとの御たしなみ也

ほけくしき—— なけきさへ心のまゝにはならぬ也

心にまかせぬ歎き 葵上の失給しも八月なり

この比の事そかし 何れも程

をくれ先たつほとなき世なりけり

なき事とも也 露けさは—— 源氏御返哥

うすゝみと—— 輕服の事を薄すみと云也こまやかとは

こぎ墨染

冷泉院のきさいの宮 秋好中宮也レセイ、ントモヨメリ

ほれくしくおほししらるゝ事—— 人に見えし

女かたにおはす也数寄心には聊もあらざる也 として

┌ (15才)

└ (15ウ)

今日やとのみ—— 御遁世の夏也

中宮なとも 明石の中宮

(五行分空白)

追

心ほそきすちは後の—— 千歳給仕の昔の如く此身な

久しく頼へしと也河 あかしのうへの心むらさぎの上のから

如くにては心細からんと心つかひなり林

薪こるおもひは今日を—— 今日を初にて行末遠く

法をねかひ給んと也 心は釋尊の阿私仙人ニ仕へ給て薪こり

菜つみ水くみ給し御のりはたゞ今か始にてある間千歳給仕

のことく行すゑとをからんと也祝してよめるなり林

御物かたりこまやかに—— 中宮と紫上と也 院入給てとは

源氏そ

こよひはずはなれたる—— 源氏中宮の御前ニわたり給て又我

御方へ渡り給也晧 中宮も紫上も寢殿ニおはしませはなり

まかりてとは西のたいへ也紫上と源との常ニおはする所也中宮と

語り給て心よけなれは御帰りに有んと也すはなれは人けはなれ

たる也 むとくは無用也清 林

かた／＼におはしましてはあなたにわたらせ給んも——

紫上の詞なり方／＼とは東の對と西の對との事也あなた

紫上おはします西對へ中宮のわたらせ給んもかたしけなしとは

と也まいらんもわりなしと也御心地の煩らはしき折なれは也

あなたにもえわたり給はねは宮そ——

「 (16 才)

「 (16 才)

「 (17 才)

中宮の御方へも紫上参り給ふ支ならぬとなりさる程に  
中宮の紫の方へわたり給と也林 宮とは中宮ぞ

物のみ哀しき御心のまゝならはまちとり給ては心よはくもとゝめ給  
つへき—— 一本ニ心よはくもとめ給つへき ともあり

巴の本には是  
なし

源氏ノ御心の切なるまゝならはかの致仕の大臣のこゝろ  
よはく見給んと源氏の御心つかひなり林

待とり給ては—— 過にし哀さを更ニもとめ留めて給へき

おとゝの御心さまなり花 源氏ノ哀しさを致仕のおとゝの

心に留めて心よはく見給んと云事と聞えたり私

めやすき程にと—— 致仕の大臣心よはく見給んを憚て

めやすき程にと用意して大方たひ／＼の御とふらひ

の悦トはかりを御返事ある也林 此段は夕霧の蔵

人の少将に語り給へる詞也花鳥ニみえたり

(五行分空白)

(白紙)

まほろし

此巻は一年中十二か月の事を奥ニ書たり 御のりニは

四季の支をかけり 一年中の事を此一巻に書心は紫

上の事を月日に忘かたき心をみせんとて也

巻の名哥を以て号す 大空をかよふ幻夢にたに見えこぬ

玉のゆく多尋よ みのりの次のとし源氏五十二の時の事

なり十二ヶ月ノ事をかゝさすかやうニ書ル 支は余巻にいまた

さる筆法也六条院の悲歎のふかき心を顕さん為也

かゝ

┌ (17ウ)

┌ (18オ)  
└ (18ウ)

下ニ擦り消シノ痕有。

薫は源氏四十八の年生れ給て今としは五歳なり  
此次雲かくれの巻は名斗にて本はなし

(一行分空白)

春のひかりを—— 百ちとりさへつる——此哥の心こもる

花もてはやす人もなし—— 紫上の事也

香をとめて—— 大方の花のたよりニ仰らるゝか我は一段と

御愁傷を問ニ来たる物をとなり

紅梅の下に—— 草子ノ詞也

まきれなく—— 源の御仁物をほめて云る詞なり

おふそうに 大かたノ心 大惣

ありはつましかりける支に—— 女三宮朧月夜などの  
事

雪消なんと—— 行ノ字を兼たり

あかずおもふへき事—— 不足ニなき也

これかれ—— 女房達なるへし

佛などのをきて給へる—— 方便かとも 掟

めならず人 目になるゝ也

中将の君とて 紫上のとりたて也

そのかたにはあらず—— 好色ニは非ヌして也

うなひ姿 花鳥ノ説よし

きさいの宮 あかしの中宮也

三宮をそ—— 匂宮也

わか宮まろか桜は—— 同人

君になれきこえん—— 源氏ノ御詞そ

┌ (19才)

┌ (19ウ)

若宮も人に—— 匂宮也

こなたのわかきみ—— かほるなり

谷には春もと—— 女三宮の心には光なきと卑下しての

給を咲てとくちる物おもひもなしと云下の句源氏の御心ニ

合さる也 ひかりなき谷には春もよそなれば咲てとくちる

もの思ひもなし 本哥

その事—— 無用の事を女三宮のゝ給と覺す源氏の御心

くらへくるし 明石上女三宮など紫上にくらふるなり

思ひしたるさまの—— あかしの上の心詞也

おもふよりのたかふふしありて 思ひの外なる夏也

古后コキセイの宮 薄雲の女院也

としへぬる人 紫上

浅からすなるに 成ノ字ノ心也

哥 かりの世は 鴈と假を兼てよめり

鴈かゝるし—— 鴈を源氏ニ比す 花鳥ニ委あり

爰にて春の御かたの事を永々と書たり

夏の御かたより 花ちるなり

すゝみややせぬ おもひのまさると也 すゝまぬ事はあらじ

と也

此名こそ—— 逢といふ夏を也葵をかねて詠り

よるへの水 神社にある水也 抄共ニくはし

ひとりばかりは—— 草子の評也

十四日シチニチ 紹巴校合せし某か本に十よかと自筆にて直ノをき

┌ (20オ)

┌ (20ウ)

けり不審 私又かやうにもあるへき事故  
後米見付し晝花にも十四日と注せり

心にはたゞ空を——かくのみおほしまきれすは——

夕霧の御心中也

昨日今日と—— 同人の御詞也

なにかしの僧都 誰共なし

くはしう—— 紫上の云をき也

かたみといふはかり—— 御子のおはせぬ支也

そこにこそは—— 夕霧に對しての給也夕霧の御子あ

またおはしませはなり

女房など多くいひあつめたれと—— 各歌よまれたれと

書とゞめすとなり 草子のこと葉そ

いかに多かる—— 極楽を想像なり 河海説如何花鳥説然へし

かことかましき虫の聲哉 此むしは晚蟬の事也かことかまし  
きは

とは事を添たると云儀也

星合みる人—— 願ひを思ふ事也

頭中将藏人少将 雲井の鷹の兄弟たち也

宮人はとよの—— とよのあかりと云て日かけとあり面白し

いまはと世をさり給へき—— 此事宇治ノ卷ニみゆ

かのすまのころほひ—— 源氏須麻ニ御座ありし時の文とも  
也

かの御手なるは 紫上の御手跡なり

この世なから—— すまの別の支也

めゞしく 女くゞしく也

御仏名 大裏に有事也又は諸家にも或又寺々ニあり

〔 21オ 〕

〔 21ウ 〕

〔 22オ 〕

春までの—— 源の御哥

千代の春—— 導師の哥

わか宮のなやはんはんに—— 匂宮也

(五行分空白)

追

ふくたみたる髪のかゝり—— うつくしく乱れたる躰也  
をかしかりし御ありさまをおさなくより——

藤つほの御夏也

みつからとりわく心さしにも—— 是は恋路の深き由

也ものゝ哀は折節なれむつふれば恋路のかなしさのみに

は限すぬ習そと也林

としへぬる人にをくれて心おさめん方なく——

むらさきのうへの事なり

かゝるなかのかなしさのみにあらずをさなきほとより——

かゝる中の哀さとは夫婦ノ中の別の事也源氏紫上の夏を

かく思ひ給也林

いかにとか此名わすれにけり—— 源の心懸給し紫

上の方ニ有し女房也中将の君と云り

(白紙)

かほる中将

此巻の題号匂兵口卿とも云也或匂宮とも

まづ雲かくれの巻ノ事を爰にて仰られけり此巻式部か筆

力ノ及さるニはあらず無言無説なり書さる処こそ見事な

たゝ書残したる所を妙処とみるへし

れ

ㄥ (22ウ)

ㄥ (23ウ)

ㄥ (23オ)

下ニ擦リ消シノ痕有リ。

嵯峨の院ニ御隠居ノ已後二三年して崩御と聞えたり

雲隠と云詞を哀傷といふ説ありさも有ましき事也さり

なから此卷ニおひては哀傷たるへし 又六十帖といふ事

雲かくれの卷ノ中ニ籠もると云儀あり是も面白し

此卷は以詞名とせり雲隠の後は薰大将の年齢をもて年記

を立へし此卷ニはかほる十四にて元服あり初て侍従ニ任し十

九にて宰相中将といはれ給し迄六か年ノ支を書り

此卷を幻の次年より薰二月ニ元服とあるまで九か年也薰ハ幻ニ

五才此卷ノ始メに十四歳トありこの卷す多は春ノ事あり かほる十

四にて二月ニ元服也その秋中将に任又十九にて三位宰相ニ任する支

あり以下ノ并卷ノ并宇治に至ては此卷ニ混乱せる所あり

別ニ抄物あり 雲隠名事河海にも万葉にもあり

有名無実事 天台四諦門支譬言之 河海ニあり

空假中事 源氏物語の中ニあり 此物語作物語なるは

空道也<sub>延喜</sub>等<sub>延喜</sub>は假諦也 雲隠は中道也釋尊五時教

同此物語示人之意也 又五十四帖皆亦有亦空之意也

又源氏雲かくれのち嵯峨院ニ住給ふともいへり是又亦有

亦空也

此物語先書好色之道終リ示道之意可見水波之譬有之

又雲隠事自桐壺至紫上哀情既<sub>故光源氏ノ終</sub>終

焉不言之若書之忘却如何又無珍氣の雲隠卷中讓

之 河海雲かくれとある題号の事<sub>宮ノ卷ニひかりかくれ</sub>

にし後と云り其心欵 同此卷はもとよりなし只名を以て其心を

あら

┌ (24才)

┌ (24ウ)

下ニ擦り消シノ痕有り。

はず也此名題にて六条院ひかりかくれ給ふ心しらるゝ也この詞  
代々の集もあまたあれ共萬葉人の逝去を皆雲隠

云り 万葉才三大伴皇子被死之時作哥 もつての と

いはねの池になくかもを今日のみ見てや雲かくれなん

此外多あり 作者の哥ニ此詞ありめぐりあひてみしや

とも——私には死去之事には有さるへし それ

河毒 所詮六条院崩御をあらはにはすして此卷ノ名ニこめたる処

甚深之儀たるにや凡上古ノ名賢の中ニをはりの様を人の知さる

事武内大臣以下其例多し本朝神仙伝などにも多みえ

たり又好色の道の先達業平もよし野川ノミ上てんの河と云

処の石窟ニ入定しける由彼所の縁起にみゆとそ 猶河海ニ詳

花鳥 也能ハ心をとめて見るへし

幻卷ノ終に越年の用意ありしか其程に六条院は滅し給をかの卷

にしるせる由紫明抄には申侍れよ宿木の卷ニ六条ノゐん世を

背給て二三年はかりさかの院ニ隠居し給へる由見えたれば此こと

にて頓滅の事は河海ニやふられ早ぬ 猶花鳥ニ委可見之 は

雲かくれ卷の事大かた爰ニしるす猶古抄共を見て可簡也

名斗を聞て巻を見ぬ事天台ニ所立ノ四教 三藏教 通教 別教 四門

三藏教 通 有門 空門 非有非空門 亦有亦空門 也 有門ノ得道は毗曇空門の得道は成

実ニ明せり非有非空門は迦旃經ニ説亦有亦空門は毘勒論ニ

明せりとさけ共 此經 命 天竺 にとまりて漢土ニ持来せず然るを

大師有門空門の藏 義 とりていまた経命を見ざる円別二教と判

┌ (25オ)

┌ (25ウ)

し給不忠義是也今の雲隠巻も作者の胸中に留まりて  
世につたはらすや

宿木ノ巻ニ薰大将の詞ニ古院うせ給て後二三年はかり末に世を

そむき給し嵯峨院にも六条院にもさしのぞく人の心

おさめん方なくなん侍けるといへり世をのかれてさかのゐんに

隠居し給と聞えたり

光かくれ給にし後—— 幻巻と此巻の間九年なるへし

薰まほろしの巻にて五歳也六才より十四迄九年なり

当代の三宮 匂宮也

女一宮は あかしの中宮腹也

つぎのぼうかねにて つまの三字見えげしにてよし 次

六の君なん 藤内侍腹也

いま後は 明石中宮也

独のすゑのためなりけりと—— あかしの上一人の為と云

也されは御ためかと有へき所を御の字を不入筆者の奇特と義

仰らるゝ也 明石上さても果報者なり皆々明石ノ末々也

御たうばり 御給也 はもし濁へし

こちゞの大殿の女御 おほいとのと読へし弘徽殿の女御也

此君の出入 薰の御支也

いとまなくくるしう—— 母君へ細々え参り給す

善巧太子 瞿夷太子 両説然共瞿夷ヲ用へし

わか身に問けんさととり—— 仏道さとりの儀にあらず実父を

しり度との事也

┌ (26 才)

┌ (26 才)

五イツのなにかしも—— 五障

后キヤイの宮はた あかしの中宮

後の世の御つとめ—— さかのみんニ御出家ノ支也

かりにやとれるかとも 変化の様也

とりもつけ給はねと—— 取付ね共と也 つくろはぬ事也

源中將—— かほる也爰ニ始テ源中將ト書タリ

わさと御心につけて—— 取分テ思ヒ給フ人はなし

大かたこそ隔つる事なく—— 薰を也

わかかく人にめてられむと—— 薰の也

一条の宮のさる—— 六ノ君を一条宮の養し給ふ也

かほるをつゐに夕霧ノ掣ニとり給り

いとうつくしうは—— あまり物ふかうはもてなし

れいの左—— 左の勝此ものかたりに多し 給す

宰相の中將 かほる也

道のやゝ程ふるに 大裏より六条まで遠かるへし

糸かのみ子たちかんたちめの—— 咲花ニくはし かもし濁へし

人数の外の人と云心なり 垣ノガ下

右のすけ 薰也

(四行分空白) 追

よろつすくれたるうつしをしめ給ひ うつしとは香匂の事也

(二行分空白) (白紙) (28ウ)

┌ (27オ)

┌ (27ウ)

┌ (28オ)

┌ (28ウ)

擦り消シノ痕アリ。

虫損ノ為一字分判読困難。

紅梅

此卷は紅はいの左大臣ノ列傳と知へし前後雜亂せり

河明 此卷は堅ノ并也春の事あり匂宮ノまきの當時の事には非ず

花鳥 卷名 按捺大納言折紅梅奉兵部宮 以詞為 卷名

匂宮卷には薰宰相中将如十九の正月の支ニしるせり此

卷には源中納言と云り同十九の秋也故ニ堅并なり又宇

治ノ八宮ノ姫君ニ心を通はしける事此卷の末に見えたり

椎か本の卷と同時の事なるへし

(一行分空白)

のちのおほきおとゝの—— 髯黒也 野路ノヂの大臣 後ノ大臣

河 兩説也 後まされるとそ 河海ニ委し

おなしごと 同し如ク也 巴校合ノ本には自筆にて事と直し

右のおほいとのお女御 夕霧の御息女

此わか君を—— ま木柱の腹なり東の方ニ住給ふ

紅梅の御まゝむすめ

いのりてまいらせ給ふつ 句を切て 下を説へし いとゝきめき——

上をはせぬ本とは 紅梅の北のかた大裏におはします留守也

月ころ何となく—— 入内の事ニ忙しき也

右のおとゝなん 夕きり也

いとわかき上らうだつが見え奉らじと思ふはしも心にまかせてで

たればさふら人さへかくもてなすが安からぬとはらだち給ふ

清濁六かしき所なる間委ク注ス しもは付字也 心ニさかせて

とはえ立ずしてそのまゝ居たる支也

「(29オ)

「(29ウ)

「祭」カ。

「ひ」ヲ擦リ消シテ「ふ」ト書ク。

つまひきに—— 撥にては引す爪にてそと引事也

軒ちかき紅はいの—— 爰を以て卷の名とせり

心のなし おもひなし也

まつ鶯 <sup>哥</sup>先待両説也いづれもくるしからす其内待の心然

へきと素然被仰キ大臣ノ方より鞞にとおもはるゝ也

中宮のうへの御つほね 明石ノ中宮也

とのゐ所 匂宮の御とのい所なり

ときとらせて 両説也 ときは猶しかるへし 時 古抄ニ委

きこえさして きつかひをししたる様躰もおもしろく書り

しらす—— 童きみの返事

聞侍りしか 爰にて句を切て  
下を読へし など——

この宮をたにけちかくて—— ひかしの君也宮の君の事也

是は昨日の—— 紅梅の大臣ニみせ奉る

右のおとゝ我らか—— 紅毒ノ詞也右ノおとゝとは夕霧

こゝろやましと思ひる給り 紅はいの心中也

なをとおもひしを なをとは大かたに也

宮の御かた 東の御かたなり

をひさき遠く—— 匂宮ノ事を云り

八宮の姫君にも—— 宇治の中ノ君也此卷権かもの

あたりなるへし 弄花ニ委

さかしらがりきこえ給ふ 母真木柱の君御女にかはりてかへし書  
給り

りやうくしう らうくしう同事也 良々 亮々 らう

┌ (30才)

┌ (30ウ)

たしなと云る同事歎

大かたにておもひ出たてまつるに 似て歎

十七八のほとにて 紅梅の嫡女也

打すがひて 妹也かもし濁へし

はれましらひ—— 紅梅のおとゝの詞也女などのいかに

風流たつる人もにほふ宮のうつり香には及ばじと也えしめぬ

哉とは女なともえにほはさぬと也 はれくしき人に

交らふ也

はしかはしにも覚え給ぬ—— 一本さしかはしとあり源

くらふれは其かはりほともなしと也 宮たちは匂宮なと

の御夏也物の数にもあらぬと云心なり林私はし

端の字か猶可問く 物をくらふるにとりさまなる夏をは其

片端ほともなきと云りその類歎

打ゑみて恨てのちならは—— 林云 咲花ニ 此詞可有引哥未見

とあり恨てのちさへとある哥不叶歎云く 意は大納言の

方より文を参らせられたる也こなたの心をしらせて後の音

つれならはいかにうれしからましと也 一葉

恨ての後さへ人のつれなくはいかにいひてか音をもなかまし

恨てのちならは頼もあらしきにははいまた御文もつかはさねは

頼ある心かはこの給也然は此引うたしかるへき歎

(白紙)

(白紙)

竹川

「(31オ)

「(31ウ)  
「(32オ)  
「(32ウ)

此卷は玉鬘と薫と同傳也是史記の筆法也史記

には五人六人の同傳あり此物語ニ同傳は此卷はかり也

以哥并詞為卷名 此卷の事花鳥ニ委

曙花 竹川のはし打出し一ふしにふかき心のそこはしりきや

匂宮の二の并也横の并也又末は堅也紅毒は堅ノ并也其

故は薫の昇進の様見えたり此卷は横の并なり匂

宮紅毒等ノ間の事在此卷又此卷のすゑは堅と見えたり

薫十四五はかりと書て次のとしの正月より七月まで書て

又次年の事あり又年比ありてとありて年ニうつる歎

御ぞう 曾<sup>オ</sup>此字なるへし昔より色ニ云共此義しかるへし曾<sup>オ</sup>

孫なと云にも是を書也 寿命院是を見出されたと素

然御物かたり候

古とのゝ ひけ黒の支也

中宮のいよく あかしの中宮なり

かむの君の昔ほいなくて—— 玉鬘と冷泉院との間の

御事なるへし

此世のすゑにや 此世は子の字を少し兼たり

右の大殿 夕霧なり

姫きみをはさらに—— あね君也たゝ人にはいやとの儀也

四位の徒従 かほる也

かんの殿 玉かつら也

右のおとゝはことくしき 夕霧也

其ことゝなくて—— 夕霧の詞也

┌ (33ウ)

┌ (33オ)

過にし御事も——源氏の御過の支

院よりのたまはする事——あね君の事を夕霧へ玉

鬘の御談合也

女一宮の女御 玉鬘の兄才也弘徽殿の御事そ

よのつねならぬ——奥ふかき姫君とはいへ共薫こころ

引れ給んと也

さらは袖ふれて——かほることほ也

あかしの侍従 玉鬘はら也一の才 昇殿をされは

殿 上へはえ参らざる也

此常に立わつらふ少将——藏人の少将也あね君を心懸て也

いたしと思て さし過たる也ほめたる心なり

かたみにゆつりて 互也薫とあるしの侍従と

鷺にも——さそはれて引給へとなり曳歌までもなし

又は引哥出てもよし

侍従は古おとくに——髻くろに似て管絃などに疎まし

おなし聲に出してうたふ 不勘なれば也

なにそもそ 高砂の曲にある支を云る也若くして恥

かしかる心なりを辞したる也尚咲花にあり

人はみな花に——少将の歌也薫こそは心をよせ給らんと也

たゝかはかりに——かくはかり也 香を兼てよめり

四位の侍従 薫の君

竹河のはし 端也橋を兼たり 竹にも河にも縁あり

竹川に夜をふかさしと——何にか心をとよめ給ん御かへり

「 (34ウ) 」

「 (34オ) 」

虫損。

有しは御道理と卑下してよめる哥也

大方のさかりなる比 大方 心を付て見よ面白しく

碁うち給とて 玉鬘のひめきみたち也

けんぞ 見物の心也 見助河 見證明

弁官は—— 一段陣なき官とそ

うへはわか君の御木と—— 母は中のきみの木と仰らる

むかし恋しう—— 姫きみよりもまだ玉かつらに

冷泉院の心を懸給也

むねいたく—— 明石の中宮を憚かる也

右かたせ給ぬ 左の勝なれば唐の乱聲也 ランザウ濁ヘシ

御かたの宰相の君 あね君かたの女房なり

母北方を—— 雲ゐのかり也

くるしうも有かなと—— 玉鬘ノ詞也

此ほとをおほしつめて—— 次の御いもとをとの心也

侍従のさうしに—— 姫君の弟の侍従の曹子へ蔵人少将来ル

つれなくて—— 姫君の支

はらだゝしう安からず 少将の心中

このまへ申も—— 媒ノ也 先も申也

こよなからまし—— 勝せまいらせん物をと云り

哀とて—— 少将の哥

手をゆるせかし 手をみると云事也

なかめゐ給へれば 少将の躰なり

今日そしる—— 大方ニおもはるゝかと思ひつればと也

「 (35才) 」

「 (35ウ) 」

うつし心もなき—— 雲居の鷹の文の詞也藏人少将の事をうつし

心もなき人といへり

うとからすめしつかはせ—— ひとつの御間なれば也

大納言とのよりも—— 紅梅の右大臣也

れいの人に—— 中将のおもと也

ゆゝしきかたにて—— かきりといふに依てゆゝしきと云り又は

命のさすかになとゞも此前=あれば也

ひた道にもいそかれ—— 死にたきと也

かむの君は御物語—— 玉鬘も被仰り給り

たゞうとだちて—— 心安キ様子也院の御事

此御かたにも あね君也

藤侍従 前=あるしの侍従と有し人也玉鬘の御腹也

手にかくる—— かほるの歌

心まとふはかりは—— あね君の支薫の心也

にけてなん—— 藏人少将の

いさや—— 玉鬘の語也

院の女御をは 弘徽殿也

二ところして申給へは 中将と弁と

侍従もけちかく 薫也

十四日 前=注早

この御息所も 玉鬘の姫君也

わた花も 花濁て読給り

御前の事どもなと—— 禁中ノ御事也

┌ (36ウ)

┌ (36オ)

月はへ 月はへたる也 是もし濁ル  
竹河のその 玉鬘の里才にての支を今よ

なかれての頼 御息所のかた付給へはかく読り  
女かたにて 是つ音の卷ニ有し事也

恨かけねど 是もし濁

さうじみはの御心ともは 上とくはさもなければ也

弁の君して 右中弁也

内の御けしきは 夕霧ノ詞也

中宮の御けしき あかしの中宮

いにしへをおもひ誦しか 玉かつらの宮仕の事也

女一宮を 弘徽殿の女一宮也

もとよりことよりはりえたる 是やくより先の妻也

限なき幸 一段の果報なくてはと也

大うへ 玉髻の支也 大上ヲホウケ

左大臣の御むすめを 竹河の左大臣也誰共なし

うちの君は 中の君也内侍督也

中納言の御悦 中納言ニ成よろこひ也

はいしたてまつり給ふ 昔は大里はかりニ限す

打かへさせ 随分と存て参たるを左様ニ抑らるゝかと也

心をさなく 無分別と也

さらにかうまで 薰の返答也

あはの御ことほりや 君子交淡如水 此句を引給り  
大臣はたゝ此とのゝ おほいとの説へし大臣殿とは読ず

〔(37オ)〕

〔(37ウ)〕

「て」ヲ擦リ消シテ「出」ト書ク。

虫損。

紅毒の右大臣なり  
心にくゝもてかしつき給ふ姫きみ—— 紅梅の大臣の中、

姫君なり

右の大とのゝ宰相中将 夕霧ノ息藏人少将也  
いますからうや おはします也

(五行分空白)

追

御くしいろにて 長き事也 千尋 色には非ず

いとさはなきのゝしらねど 啼のゝしらねと也無ノ字にてはなし

御恨ふかくはとりかへありておほす 姫君のかへに妹ノ姫

君と玉鬘の思す也

侍従の君はこの御返事せんとてうへにまいり給ふを——

薫の文の返事をせんとて玉鬘へ参り給をみて藏人少

将腹たつ也

このまへ申も—— 中将のおもと

さばかりのまきれもあらし—— 女御后の中ノ

ましらひニは左様の妬み事ある物也それを御分別なくて姫

君を参らせ給しやとなり

おのこのかたにて奏すへき—— 男ノ申夏は似合ぬと也

(三行分空白)

(白紙)

(白紙)

(白紙)

(白紙)

┌ (38オ)

┌ (38ウ)

┌ (39オ)

┌ (39ウ)

┌ (後遊紙オ)

┌ (後遊紙ウ)

┌ (見返し)

┌ (裏表紙)

左下ニ「実践女子大学図書館印」  
(朱单边長方印)「常磐松文庫」  
印(朱单边長方角印)ヲ捺ス。  
左下ニ「月明荘」(朱单边長方  
角印)ヲ捺ス。  
左上ニ「墨付三十七枚」トアル  
付箋アリ。